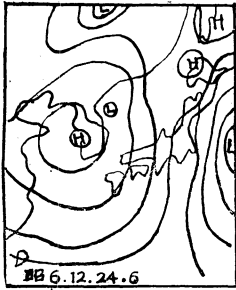


り、消散後雨天の場合も 35 % である。第 10 表は発生前、発生時、消散後の霧と天気との関係である。

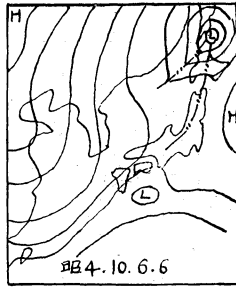
第 10 表 霧 と 天 気

天気	前日 14 時		当日 6 時		当日 14 時	
	回数	%	回数	%	回数	%
○	55回	27%	13回	7%	47回	23%
①	45"	22"	3"	1"	57"	28"
②	83"	41"	43"	21"	73"	36"
⊙(⊗)	19"	10"	19"	10"	25"	13"
⊙	0	0	124"	61"	0"	0

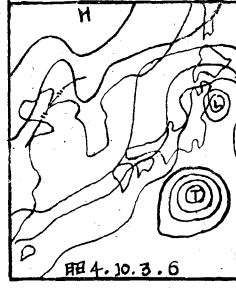
第 1 図 High 型



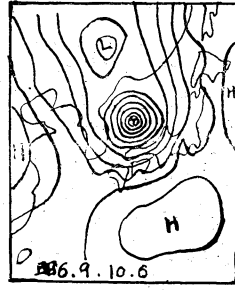
第 2 図 Front 型



第 3 図 中間型



第 4 図 中間型



ii. 霧と不連続線

第 2 図のように不連続線が走っている場合、太平洋上を日本列島に平行して走っている場合等は降雨中濃霧が続く。これを Front 型とした。

iii. i, ii の中間の場合

第 3 図のように台風が本邦に接近した場合及び第 4 図のように日本を通過して日本海上にぬけた場合、又は日本列島に接近しつつ北海道方面に移動した場合等は連日終夜にわたって霧が発生する。これらを中間型とした。

以上のパーセントをみたのが、第 11 表である。一年を通じて、High 型は 41 % で最も多く、中間型は 31 % Front 型は 28 % となっている。

7. 霧発生と気圧配置

中央気象台発行の印刷天気図により調査した結果を High 型、Front 型及び中間型の三種に分類した。

i. 霧と高気圧

本邦が高気圧の主部におおはれる場合が最も多く、第 1 図のようにその縁辺に位いする場合<sup>(4)</sup>はかなり濃霧が発生する。これらを High 型とした。

高気圧圏内は夜間の輻射冷却により、又は滞流している空気の縁辺は優勢なる環流により霧発生に至る。

第 11 表 原因別霧発生回数

型	季	春	夏	秋	冬	年				
Front 型	5 回	26%	18回	35%	26回	26%	7回	22%	56回	28%
中間型	5 "	26 "	13 "	26 "	33 "	33 "	12 "	37 "	63 "	31 "
High 型	9 "	48 "	20 "	39 "	41 "	13 "	13 "	41 "	83 "	41 "

御指導をいただいた高橋浩一郎先生に感謝します。

参 考 文 献

- (1), (3), (4) 高橋浩一郎： 研究詳報（霧の予報に関する諸問題）昭和 20
- (2) 中村邦彦： 多度津地方における（霧と予報）昭和 22 （長野県飯田市東中学校）

黒田正夫 雪の科学 A—5—162 頁, 280 円, 54 年 4 月, 同和春秋社観察と実験文庫の一。日本の半分は一冬中、雪に埋っています。これは大変なことです。と著者は序の書き出しに力強く書きつけている。雪の降るわけから書きはじめて、雪の力を説明し、なだれとスキーに説明を加えてある。内容は、1. 降る雪、2. 積る雪、3. 積った雪、4. なだれと除雪、5. スキーと 5 篇に大わけし、各篇を細分して全体は 53 章となっている。降る雪では雪が大気中でできて降ってくる説明をして雪と樹氷の別をのべ、雪はどんなところに降るかを示す。約 20 頁でこれだけの内容を中・高校生にわかりよく書くのは大変なことであろう。このところで昇華を晶華としているのはどうしたものであろう。不連続線の図示も少々気になる。第 3 篇の積った雪は著者の重点をおいたところ。さすがに珍しい写真と独創的な挿図で引張り強さ、押しつけ強さ、たち切り強さ等を説明し、積雪の種

類を表示する。日本各地で三冬間、約 1 万のデータを取り、密度、硬度、粒度を整理した結果は貴重なものである。積雪の観測は読んで知識を持っただけでいいではなく、実地のデータをとることが大切である。中学校や高等学校で積雪の観測を実施し有力な基礎資料を提供している地方もあることであるから、単なる興味からだけでなく、数多くの正しく指導された常時観測がほしいものである。第 4 篇ではくわしいなだれの解説をする、あわ、なで、じこすりについてわかりよく書き、なだれの予防と避け方をのべる。最後に除雪を説く。積った雪となだれは著者独自のもので、類書がなく、この方面では単なる中・高校生の読みものとしただけでなく一般に読まれたいものである。解説、用語、レイアウト等に二三問題のところもあるが、全体をとおして雪に対する熱情があふれ、タッチの荒い油繪を見ているような感銘を受ける。

(伊東疆自)